

一般社団法人日本社会福祉学会

第72回秋季大会報告

第72回秋季大会 実行委員長 保正友子(日本福祉大学)

1. プログラム内容

2024年の日本社会福祉学会第72回秋季大会は、「現代における社会福祉の本質を探る」をテーマに、去る10月26日、27日に愛知県の東海市芸術劇場と日本福祉大学東海キャンパスで行われました。対面とオンデマンド配信の開催で、参加者は722人(うち中韓自由発表者5人含む)と、盛況のうちに終了しました。この場をお借りして、参加者、登壇者、理事、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。プログラム内容は以下のとおりです。

1日目午前中は東海キャンパスにてスタートアップ・シンポジウムを開催しました。「実践と研究の循環を考える」をテーマに、山野則子氏の司会のもと、3人の方(木佐貫悦子氏、松本大樹氏、山本綾子氏)が発言し、谷口由希子氏がコメントされました。

午後は東海市芸術劇場にて開会式が行われました。そこでは、日本社会福祉学会和気純子会長、東海市長花田勝重氏、第72回秋季大会長で日本福祉大学学長の原田正樹氏が挨拶しました。次の学会賞授賞式において、学術賞は大澤真平氏、木原活信氏が、奨励賞(論文部門)は畠中耕氏が受賞されました。おめでとうございます。

その後は、大会校企画シンポジウムです。「生活不安定層への新たなセーフティネット」をテーマに、中央大学教授の宮本太郎先生の基調講演に続き、コーディネーターの山田壮志郎氏のもと3人の方(石川久仁子氏、垣田裕介氏、川島ゆり子氏)が発言されました。コメンテーターは引き続き、宮本太郎先生にお願いしています。

そして夜は、東海キャンパス生協食堂にて情報交換会を開催しました。123人が参加され、外国からの参加者の挨拶や次期開催校の同志社大学教員の挨拶、本学教員の湯原悦子氏と伊藤文人氏による楽器の生演奏が行われ、大いに盛り上がりました。

2日目は終日、東海キャンパスで開催しました。午前中から午後にかけての口頭発表は157件、ポスター発表は75件、特定課題セッションは3件と、多数の発表がありました。

学術シンポジウムは、索宏氏、藪長千乃氏、梶原浩介氏がコーディネーターを務め、中国からは崔月琴氏、フィンランドからは勝井久代氏、日本からは黒木保博氏が発言されました。

特定課題セッションは、コーディネーターの高木博史氏のもと、「わが国のソーシャルワークは現代政治にどう向き合うのか/向き合ってきたのか」をテーマに行われました。

そして学会企画セッションは、コーディネーターの伊藤嘉余子氏のもと「社会福祉における『つながること』を再考する～『つながり』と『匿名性』～」をテーマに、4人の方(姜恩和氏、掛川直之氏、小澤昭彦氏、松岡是伸氏)が発言し、山縣文治氏がコメントされました。

いずれの企画においても熱い議論が交され、アプローチは異なりますが、現在における社会福祉の本質に迫ることができた機会だったのではないかと考えます。

2. 大会校の立場からの所感

本大会の開催にあたり、私達に課せられた最大のミッションは「今後のひな形になる大会運営を行うこと」でした。少子化時代に突入し、以前よりも教員の仕事が忙しくなるなかで、持続可能な大会運営のあり方の確立は喫緊の課題です。かくいう実行委員会のメンバーもかなり多忙でした。本学の70周年事業に位置づけた関係で、大会長は学長、実行委員長の私は社会福祉学部長、それ以外のメンバーもほとんどが大学や大学院執行部で、時間に余裕がある人は一人もいません。

そんなメンバーで準備と運営を行うなかで、「ロケーションの良さ」「有機的連携」「ホスピタリティ」がキーワードとなりましたので、それぞれの観点から所感を述べます。

まず「ロケーションの良さ」です。本学は4キャンパスありますが、今回は名鉄名古屋駅から17分、中部国際空港から20分の東海キャンパスで開催しました。交通の便のみならず、宿泊施設や食事処も豊富という利点がある一方で、私達が日頃使っていない校舎のため細かい部分での勝手がわからず、何度も東海キャンパスや東海市との打ち合わせを行いました。お蔭様で、来校された方々からは「ロケーションが良い」という嬉しいお言葉をいただきました。

次に「有機的連携」です。運営上の最大の特徴は、地元の学術集会サポート会社の(株)ユピアに入ってもらったことです。本学では、2010年度にも秋季大会を行いました。当時とは状況やメンバーが異なり、今回のような大きな大会の開催は初めてに近い感覚でした。どのようなスケジュールで誰がどのように動き、どのような備品を揃えれば良いのかわからないことばかりです。しかし、(株)ユピアの伴走により、無駄がない準備や運営ができました。特に、学生アルバイトを3人の教員が率いるチームに分け、それぞれにタイムスケジュールやマニュアルの詳細を定めて動くことにより、仕事の重複や手持ぶさたな状態をなくしました。このように、外注できる部分は外注するの方向かと思えます。

そして、「ホスピタリティ」です。まず、トラブルがあった際には大会事務局が控える本部に情報が集約され、私達が即座に対応できる仕組みをつりました。小さなアクシデントはいくつかありましたが、幸いにも大きなトラブルは防げました。また、休憩所にはお茶とお菓子を配置し、参加者の方に召し上がっていただいたり、情報交換会で生演奏をしたりと手作り感満載でした。これにより、多額のお金をかけなくても、おもてなしができることを実感する機会になりました。

今後は総合的な総括を行い、翌年の大会校に引き継いでいく予定です。そして、本学会としての「持続可能な大会のあり方」につながれば幸いです。

名誉会員の推挙に寄せて



黒木 保博 新名誉会員

【本学会役員歴】

- 第20期 理事（3年）
- 第21期 理事（3年）
- 第23期（第2期）副会長（1年）
- 第25期（第4期）副会長（2年）
- 第26期（第5期）副会長（2年）

役員通算5期（11年）



この度、日本社会福祉学会名誉会員に推挙いただきました。厚く御礼を申し上げます。喜んでお受けいたします。ありがとうございます。

1973年、修士課程の院生時に学会入会を承認されました。51年間、学会会員活動を続けられてきたことを感謝します。この間、合計11年間に渡り、理事を務めさせていただきました。学会活動を通じて、また理事在任中に、多くの会員の皆様との出会いがあり、ご指導、ご助言を頂戴しましたことを心から御礼申し上げます。

まず、理事任期前半の2001年から2期6年間は、渉外担当理事として、主に日韓学術交流等の学会外渉外係を担当させていただきました。大橋謙策会長時に2002年の日韓学術交流覚書締結がありました。2004年から3年間、高橋重宏会長でしたが、講演会や国際シンポジウム開催だけでなく、学会員による共同研究に両学会が取り組むことになりました。私が理事と共同研究員を兼ねて、日本側の代表になりました。両学会の共同研究は3年間だけでしたが、韓国側3人の共同研究者の先生方とは、その後もずっと連絡を取り合い、研究交流が続いております。

理事任期後半は、まず、2010年から、副会長、機関誌編集委員会委員長を1年間務め、在外研究のために中途辞任をしました。ご迷惑をおかけしました。白澤政和会長の時でした。

2014年からの2期4年間は、副会長、国際学術交流促進委員会委員長を務めさせていただきました。岩田正美会長、岩崎晋也会長でした。懸案となっていた日本、韓国、中国の学術交流の覚書締結をめざして、委員会は取り組みました。韓国、中国との連絡窓口を担当していただいた諸委員の尽力が実り、2017年に3カ国の覚書締結にこぎつけることができました。難問を交渉したわけではなかったのですが、細かな点で、なかなか合意が得られず、委員を務めていただいた先生方にご苦勞をかけました。ご尽力をいただきました先生方に、心からの感謝を申し上げます。最終的な詰めの段階で、私費で国際電話をかけて、交渉・確認していただいた委員がおられたと思います。お詫びします。

理事在任中の話ではありませんが、私と日本社会福祉学会事務局とのなつかしい「思い出」を書いておきます。実は、同志社大学大学院修士課程2年生の時から、2年間半、日本社会福祉学会事務局員のアルバイトをしました。三浦文夫会長でした。日本福祉大学高島進先生から事務局を引き

継ぎました。学会員が1000人を超えた時代でした。当時は庶務担当理事が在職する大学で学会事務局を担当するというルールがありました。しかし、会員数と業務の増大による事務局対応能力から、大学の担当には限界があるという判断が理事会でなされました。そこで、全国社会福祉協議会内地域組織部に学会事務局業務をお願いすることになりました。三浦会長から一番ヶ瀬康子会長に交代する時でした。引継ぎ書類を風呂敷に包み、新幹線で上京し、全社協で引き継ぎました。※1 20数年後、私が学会理事となり、学会の委員会に出席した時に、「院生アルバイトが理事になりましたか」と、ニコニコ顔の三浦先生から喜んでいただきました。三浦先生はアルバイトをしていた私のことを覚えておられました。

もう一つ、書き残しておきたいことがあります。1998年4月、私は日本社会事業学校連盟事務局長を務めることになりました。社団法人化に取り組むことになり、法人化の主管省庁との交渉のために、学校連盟東京事務所を開設することになりました。四谷の事務所を賃貸するが、学校連盟だけの予算では負担が重すぎるということになりました。大友信勝先生、古川孝順先生、大橋謙策先生等の交渉やサポートもあり、学校連盟事務局と学会事務局、等との合同事務室を開設することができました。夕方、委員会を終えての先生方との帰路、四谷界隈の居酒屋での宴会が、なんともなつかしい思い出です。

※1 『社会福祉学研究の50年 日本社会福祉学会のあゆみ』（2004年、ミネルヴァ書房）、306ページには、日本福祉大学から全社協に学会事務局が移動したような記述があります。実際は、同志社大学から全社協に移動していることを記しておきます。

名誉会員の推挙に寄せて



白澤 政和 新名誉会員

【本学会役員歴】

- 第19期 理事（3年）
- 第20期 理事（3年）
- 第22期（第1期）副会長（3年）
- 第23期（第2期）会長（2年）

役員通算4期（11年）



この度は、日本の社会福祉をリードしてきた日本社会福祉学会から名誉会員のご推挙いただき、大変光栄に思っています。

私は現在も大学で主に修士課程、博士課程、および研究生の25名程度の論文指導を中心に仕事をしています。高齢者の研究をしてきたので、長年にわたり議論されてきた活動理論と離脱理論が気になります。現在の心境は、社会の側からの制約も大きいですが、活動思考から離脱思考に変化していることを実感しています。文部科学省の科学研究費をこの30年近く連続していただけてきましたが、今回は申請しない決断をしました。この決断には、離脱思考に変化していく私があると思います。ただ、活動の限界を見極めながら、教育等での活動思考する私が依然としてあることも事実です。

以上のような活動理論から離脱理論に徐々に変化している私ですが、毎週オンラインで真剣勝負の思いでゼミを行っており、毎年数名の博士の学位が出せていることがうれしい限りです。そのこともあり、昨年度、大学のベストメンター賞（博士課程）の栄に浴しました。また、日本ソーシャルワークセンターの代表として、子ども家庭ソーシャルワーク資格を確立することに関わっています。今年度はじめての子ども家庭ソーシャルワーカーが誕生することを楽しみにしています。

年を取ると昔話が多いと言われるかもしれませんが、私のその一人で、昔のことしか覚えていないのかもしれませんが。日本社会福祉学会の思い出で最も印象に残っていることは、初めて理事をやらせていただいた時に、編集委員長という大役が与えられました。その当時の学会誌はB5版の白表紙であり、編集委員会はありますが、査読委員もおらず、編集委員が査読をしていました。それで、岩田正美先生、冷水豊先生等に編集委員になっていただき、学会誌の抜本的改革を行ったことが最も心に残っています。まずは、雑誌編纂の事務局をワールドプランニングに外部委託し、査読委員制度を作り、投稿から掲載までの手順を示し、また学会誌の体裁を現在のカラー刷りのA4版に変更したことです。これによって、急に投稿論文が急増したことを覚えています。今後益々、学会の顔として、多くの論文が掲載される学会誌に一層発展することを期待しています。

もうひとつの思い出は、理事の第2期目で、大橋理事長のもとで、学会事務局長として、学会50周年を迎えて、会員の励みになる事業をするようにとの命を受け、学会賞を創設することを提案し、理事会で認めていただいたことです。この賞を目標にして、会員の皆さんには研鑽を積んでほしいと願っています。

今年の秋季大会に出席させていただきましたが、大変盛会でした。学会の今後の益々の発展を祈念しています。

名誉会員の推挙に寄せて



牧里 每治 新名誉会員

【本学会役員歴】

- 第20期 理事（3年）
- 第21期 理事（3年）
- 第23期（第2期）理事（2年）
- 第24期（第3期）副会長（2年）
- 第27期（第6期）監事（2年）



役員通算5期（12年）

身に余る光栄に預かることができ、名誉会員として推挙、承認決定いただきました会員の皆様をはじめ、理事役員の方々に感謝申し上げます。記憶に誤りがなければ、1973年度に入会して、およそ半世紀にわたって本学会に所属させていただいている。上智大学で開催された第21回大会で発表するにあたって、慌てて入会手続きを取ったように思う。当時大学院2年生ではあったけれど、修士論文執筆の構想を練る中で、五里霧中のなかにあった研究テーマの意義を確かめたかったのだろう。「コミュニティケア概念における予防機能」について発表したと思うが、発表会場には阿部志郎先生、三浦文夫先生、嶋田啓一郎先生などがおられて、無我夢中で何を話したのかまったく思い返せない。忘れられない思い出である。

振り返れば、2001年度から理事、副会長、監事など役員を務めさせていただき、その功労をねぎらって名誉会員の称号を授与してくださったのだと推察する。通算すると、理事4期、監事1期のおおよそ12年間役職を務めさせていただいたことになる。理事着任早々に大橋謙策会長の下で、科学研究費助成の申請に関する社会学分類からの独立への働きかけの結果、社会福祉系学会所属の審査委員を選出できる成果をえたことは待望の喜びだった。この間、学会50年史（『社会福祉学研究の50年～日本社会福祉学会のあゆみ～』ミネルヴァ書房、2004年）の編纂にも担当理事として携わらせてもいただいた。関西部会史の執筆も担当したが、部会事務担当が大学間の輪番制であったことと、部会活動の記録や資料も会員個人に託されていたためか、記録、資料とも紛失が多く、まとめるのに苦労したことを覚えている。そのほか学会事務所の四谷への移転とか、その後の社団法人化で忙しくなったことも大変だったけれど、懐かしい思い出になった。日本学術会議の連携会員も親学会の本学会が中心となって選出派遣している形であったようで、学術報告を出すための研究会やシンポジウムもやりがいのある学術活動であったように思う。現在は少しやり方も異なっているが、日本学術振興会のいわゆる科学研究費助成の審査委員も日本学術会議から推薦していたように、学会の役員を引き受けると学術系の役職が次々と委嘱されてきて予想外に忙しくなる体験も味わった。

最後になったが、年会費免除など厚遇していただけることは有り難いが、学会財政を思うと心苦しいという思いも去来する。選挙権も被選挙権も無くなるが、枯れ木も山の賑わい、名誉会員として社会福祉研究の奥の深さ、広がり、多様さ、面白さを伝承する役割くらいは担えるかなと考えている。

2024年度 一般社団法人日本社会福祉学会 学会賞受賞に寄せて

学会賞審査委員会による審査の結果、2024年度の学会賞が決定し、学術賞（単著部門）として大澤真平会員ならびに木原活信会員が、奨励賞（論文部門）として畠中耕会員が選ばれました。

授賞式は、第72回秋季大会一日目の2024年10月26日（土）に東海市芸術劇場大ホールにおいて、開会式に引き続いて行われました。

受賞された方々からの喜びの声をお届けします。



小澤副委員長 野口委員 金子副会長 大澤会員 木原会員 畠中会員 山縣委員長 和気会長 笹岡委員

◆ 学術賞（単著部門）大澤 真平（札幌学院大学）

受賞作：『子どもの「貧困の経験」

——構造の中でのエージェンシーとライフチャンスの不平等』

（法律文化社、2023年5月30日刊）



この度は、学会賞授与の栄誉にあずかり、本当にありがたく思っております。審査の労をお取りいただいた審査委員の先生方に、まずは感謝申し上げます。また、本書に関わってくださったすべての方に心より御礼申し上げます。

本書は貧困のなかに暮らす子ども・若者の主体的な経験を、貧困の構造的な次元を踏まえたうえで明らかにしようと試みたものです。一方で本書の隠れたテーマは、貧困研究における「人間観」を問う点にあったと思っております。本書と同じく貧困のなかにおかれた当事者の質的研究に関しては、これまでオスカー・リースの「貧困の文化論」や、特に日本ではブルデューの影響が大きかったこともあり「文化的再生産論」を参照枠組みにすること

が多かったように思います。しかし、本書のバックグラウンドになっているロールズやセンやヌスバウムらの著作から学びを深めていくなかで、どのように生きていくか、どのようなものを大切にするかは、個々人の自由の問題であるということに大事にしたいと思うようになりました。また研究職につく以前に、8年ほど高校で仕事をしていましたが、関わってきた一人ひとりの子どもたちの、それぞれが大事にしている価値や生き方を尊重し、そして失敗も含めて生きていける基盤を整えることを、貧困・不平等の問題の核心におかなくてはならないと考え本書を書き上げました。そのことがどれほど伝わっているかは心もとないですが、本書はそのような「人間観」を前提に置いたつもりです。

ところで、きわめて私事で恐縮ですが、昨年度の学会賞を妻が受賞しております。我が家にとっては二年続けての社会福祉学会賞という栄誉ある賞をいただくことになりました。この間、妻と私と交代で育児休職を取りながら、ふたりで三人の子どもを育ててきました。おそらく研究を進めるのに通常よりとても時間がかかっているのだらうと思います。それでもなんとか夫婦ともに、それなりの研究成果を上げることができたことを誇りに思っています。これからの若い世代の研究者のみなさんには、ワークライフバランスを取りながら、焦らずに研究を進めていってほしいと願っております。

最後に、これまでに会った多くの子ども、若者、そしてインタビューに応じてくださったおひとりお一人に感謝を述べたいと思います。みなさんから受け取ったことを、少しでも子どもや若者が自分の生活を実現できる社会的な環境を整えることに還元していきたいと思っております。

◆ 学術賞(単著部門) 木原 活信(同志社大学)

受賞作:『ジョージ・ミュラーとキリスト教社会福祉の源泉

——「天助」の思想と日本への影響』

(教文館、2023年2月22日刊)



このたび、日本社会福祉学会の学会賞を授けていただいたことに、心より感謝いたします。かつて本学会の会長を務めた身として、本来であれば会員の中から優れた研究を見出し、彼らを受賞者として推挙する立場にあるべきではないかと、この賞を受けることに逡巡する気持ちがなかったわけではありません。しかし、生涯現役の研究者であり続けたいと願う者として、今回は素直に喜び、謹んで受賞させていただこうと思っております。私の研究は、専門的でややマニアックな歴史研究の学術書であり、一般の人々にはほとんど読まれることもないでしょうし、現代の社会福祉政策や実践に直接役立つこともないかもしれません。しかし、そのような本を社会福祉学

会が評価してくださったことに、特に感謝いたします。

本書の研究対象であるブリストルの孤児の父、ジョージ・ミュラーという人物を知ったのは、40年前の大学1年生のときでした。当時、ある方から『信仰に生き抜いた人 ジョージ・ミュラー』(いのちのことば社)という本を勧められ、それがミュラーとの最初の出会となりました。そして、はからずもその本を勧めた人が、後に私の妻となりました。その当時は、ただ素朴にミュラーの生き方に感銘を受け、自分も彼のよう

なキリスト者として社会福祉の実践家になりたいと、漠然とした憧れを抱いていたにすぎません。

その後、石井十次の日誌、山室軍平の自叙伝、新島襄の書簡などを解読する中で、ミュラーの名前に何度も出会い、歴史上の点と点が結びついていくのを実感しました。それは私にとって、一種の驚きと感動をもたらす体験でした。日本の社会事業家である石井や山室にとって、ジェーン・アダムズやリッチモンドよりもミュラーが与えた影響のほうが大きいことも明らかになっていきました。その後、私は本格的に学究生活に入り、冷徹な実証主義に基づく歴史研究を進めていく中で、伝記に描かれるミュラーの「出来過ぎた話」が果たして本当なのか、懐疑的な目で見つめるようになりました。次第に、不遜にも史実を批判的に検証してみたいという野心を抱くようになり、これが私の研究のもう一つの動機となりました。ここ7、8年にわたって集中的に史料批判や資料分析を進めてきた結果、その史実が歴史的な批判にも耐えるものであり、否定することができないことが明らかになりました。

さらに、ミュラーが私と同じプリマス・ブレザレン系の「キリスト集会」の一員であり、彼自身がその初期のリーダーの一人であったことを知り、大変驚きました。そのおかげで、通常では手に入らない内部資料を比較的容易に入手することができたのです。不思議なことに、ブラザレン運動の源泉を探り、そのルーツをたどる過程は、阿部謹也氏の言葉を借りれば、「自分の中に歴史を読む」というプロセスそのものでした。自分のルーツと重なる部分を感じながら、ミュラーを通してブラザレン運動の歴史を掘り下げていく中で、共感し「わかる」と思える瞬間も多くありました。

約40年前、妻に勧められて読んだ伝記がきっかけとなり、このたび一冊の研究書として結実したことは、まさに不思議な邂逅です。本書は、多くのご縁や支えがあって初めて誕生したものといえますが、それら一つ一つが「はからずも」「見えざる手」に導かれていたのではないかと、深く考えさせられました。

◆ 奨励賞（論文部門） 畠中 耕（福井県立大学）

受賞作：「1930年代静岡県における新興報徳運動と新興生活館」

（『社会福祉学』第64巻3号掲載 2023年11月30日刊）



この度は奨励賞という栄えある賞を受賞することができまして、心より嬉しく思います。一地域を研究対象とした地味な論文ですが、ご推挙いただきました審査委員の先生方にはあらためて御礼申し上げます。「学会賞事業要綱」には、「今後の研究の発展が期待される」ことが明記されています。まだまだ研究途上であることを自覚しつつ、謙虚に邁進する所存です。

私自身これまで特定の地域をフィールドに設定し、社会福祉の史資料の発掘に取り組んできました。地域の社会福祉の実践活動を掘り下げること、通史研究では網羅しきれない多様な史実を提供したいとの漠然とした思いからです。静岡県を研究対象に設定したのも、その延長に位置づけられるもので、当初から「報徳」の影響を意識して研究に着手したわけではありませんでした。社会事業への影響を意識する機会となったのが、静

岡山歴史文化情報センターに所蔵されている鷺山家文書との出会いです。同文書は小笠郡土方村長であった鷺山恭平氏が所有していた資料群で、報徳運動関係資料の他に県社会課、社会事業協会関係資料が豊富に含まれていて、「新興生活館」研究に着手するきっかけともなりました。講評でもご指摘いただきましたが、「新興生活館」をふくめて近代報徳運動に対する評価は難しく、どうしても国民精神総動員運動の一翼を担ったという評価に終着せざるを得ません。しかしその一方で社会保障制度が十分に発達していなかった当時（そのことを批判することは容易ですが）、地域が直面していた生活課題に対して教化的方策により民衆が主体的に対処する機会を作ったことも事実です。相反する評価の「ゆらぎ」や「緊張関係」を自覚しながら、今後の研究を進めていきたいと思ひます。

本研究を進めるにあたっては、多くの方々からご支援をいただきました。お一人お一人のお名前を挙げることは出来ませんが、指導教授の今井小の実先生、地域史研究の先輩である矢上克己先生、報徳運動史研究の先輩である前田寿紀先生には、とりわけ多大なるご支援をいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。そして最後に、今は亡き恩師の田代国次郎先生に受賞の報告をしたいと思ひます。「平和的生存権」の保障実現に生涯をかけた孤高な研究者人生は、永遠に到達を見ない私自身の目標です。「早く一冊の本にまとめて世に問いなさい」とのお叱りの声が聴こえてきそうですが、これからも一歩一歩精進してまいります。



地域ブロック情報



日本社会福祉学会には7つの地域ブロックがあり、それぞれに特徴的な活動が展開されています。今号では、東北地域ブロックの活動についてご紹介いたします。

東北地域ブロックから

東北地域ブロック担当理事
元村 智明(東北福祉大学)

東北では、年度初めの2024年4月2日に岩手県沿岸北部を震源とするM6.0で最大震度5弱の揺れがあり、北海道から関東甲信越にかけて震度を観測しました。また2024年7月24日から26日にかけての東北地方を襲った記録的大雨は、25日に線状降水帯が山形県で発生し、秋田県や山形県を中心に土砂崩れや床上浸水の被害があり、秋田県内および山形県内の市町村では災害救助法の適用となりました。

被災された皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。日常生活は、常に災害と隣り合わせにある状況だとあらためて思います。

そのなかで7月28日(日)に東北文教大学(山形市)を会場に「子どもの育ち×知る・引き出す・寄り添う—子どもの「自己肯定感」「自尊感情」を育む—」をテーマに第23回研究大会(山形大会)を開催しました。口頭発表では、分科会3会場で15演題の報告があり、参加者50人でした。記録的大雨後の大会開催について不安や葛藤がなかったわけではありませんが、開催校では入念なご準備とご対応をしていただきましたこと感謝申し上げます。そのような状況であらためて社会福祉学の中で災害と福祉を考える機会になった大会であり、参加者の皆さんと災害時の生活支援の問題を共有できたように考えております。

そして東北部会は、その大会にあわせて『東北の社会福祉研究』(第20号記念誌)(全254頁)を研究論文5編、研究ノート6編、実践・調査報告1編、これまでの研究大会と歩みを振り返る頁を特集して7月に発刊しました。

年内12月14日(土)には、東北福祉大学仙台駅東口キャンパス(仙台市)で第21回日本社会福祉学会フォーラムが、「社会福祉学が切り拓く普遍性の探究—人びとの切実な声に応えるために—」をテーマに開催いたします。報告のひとつには、「災害福祉」の考え方や日常生活のなかに防災の視

点を活かすこと、災害によって日常生活そのものが中断してしまう状況の中で、福祉支援の考え方が含まれていることなどに言及いただく報告があります。

日本国内でも世界に目を向けても「切実な声」が常にあります。そこには、危機的に生存を考える状況から日々の生活を考えることまで多岐にわたる問題がよこたわっています。第21回フォーラムでは、「切実な声」と向き合うことを社会福祉の学問のなかで考えることを共有できれば幸いです。東北部会では、参加者の皆様をお待ちしております。

すでに第21回フォーラムの受付をしておりますので、ふるってご参加ください。



初期キャリア研究者支援—未来へのつながりを意識して

研究支援委員会 委員 島崎 剛(久留米大学)



現在研究支援委員会では、初期キャリア研究者に対する研究支援の一環としてスタートアップシンポジウムを企画運営しています。同企画は、日本社会福祉学会秋季大会時に開催しており、初期キャリア研究者を取り巻く諸課題をテーマとして取り扱うことで、会員・非会員を問わず、多様な初期キャリア研究者と社会福祉学の学界とのハブ機能を担っています。

去る10月26日、日本福祉大学を大会校として開催された日本社会福祉学会第72回秋季大会では、「実践と研究の循環を考える」という壮大ともいえるテーマのもと、シンポジウムを開催しました。参加者は102名(非会員20名、関係者除く)であり、例年にも増した関心の高まりを感じました。

当日は、名古屋市立大学大学院の谷口由希子先生をコメンテーターとしてお迎え、「実践者としての立場を持つ初期キャリア研究者」として木佐貫悦子様(愛知県保健医療局こころの健康推進室通報対応グループ主査)、「実践経験を持たない初期キャリア研究者」として松本大樹様(日本福祉大学大学院社会福祉学研究科社会福祉学専攻修士課程)、「研究対象としての経験がある社会福祉実践者」として山本綾子様(三重県松阪保健所保健衛生室地域保健課課長代理)の3名のシンポジストからの発題をうけ、研究支援委員会委員長の山野則子先生(大阪公立大学)のコーディネートにより、熱のこもった議論が展開されました。

実践と研究の循環は、実践の科学化を志向する側面を持つ社会福祉学にとって重要な意義を持ちます。そこで、研究へ取り組む初期キャリアの段階においてその意義を意識する機会を持つことは、研究者としての責任を自覚するうえで重要であり、本シンポジウム企画におけるテーマの着想にあたって根幹となる問題認識でした。

他方、社会福祉学の学問領域で研究を志す初期キャリア研究者は、ストレートマスターよりもむしろ実践者の立場や、一定程度の実践経験を経た立場を持つ研究者が多く存在します。「実践の効果を証明したい」「実践を理論化したい」「科学的根拠を持って実践したい」など、それぞれに研究の道を歩む志を持っています。しかし、基礎的研究に着手するなかで苦悩し、初志を貫くことが困難な状況となる初期キャリア研究者も見受けられます。研究支援委員会でこれまで取組んできた各種企画では、以上のような初期キャリア研究者の多くの苦労や悩みを共有してきました。今回の企画は、「未来へ繋がる意識を持つ」というシンポジウムを総括したメッセージへ込められたように、多様な立場に置かれる初期キャリア研究者の研究意欲を刺激する機会となったのではないかと思います。

研究支援委員会では、今後も研究支援に関する企画を提案するとともに、初期キャリア研究者の主体的な参画を促すことで、活動の活性化を図りたいと考えています。早速ですが、12月21日には第5回CS-NETサロン「サロンを企画してみませんか?」を予定しています。同志社大学今出川キャンパスを会場として、ハイブリッドで開催します。学会ホームページに案内を掲載していますので、ぜひご参加もしくはお声かけいただけますと幸いです。

最後に、スタートアップシンポジウムの実施にあたり、日本社会福祉学会第72回秋季大会の大会

校として諸々のご準備とご配慮をいただいた日本福祉大学の先生方、積極的にサポートして下さった学生スタッフの皆様に、この場をお借りして感謝申し上げます。

学会会員の皆様におかれましては、今後とも研究支援委員会の活動にご理解とご協力をいただきますと幸いです。

日本社会福祉系学会連合からの報告

日本社会福祉系学会連合
会長 金子 光一(東洋大学)

日本社会福祉系学会連合(以下、本連合)は、2024年5月26日の総会から新しい体制となりました。本連合は、次の4つの事業を大きな柱として活動しています。

- (1) 加盟学会の全国大会や機関誌に関する情報の共有
- (2) 災害福祉に関する図書、報告書、論文、関連アーカイブの収集
- (3) 加盟学会への補助金支給(制度)
- (4) 日本学術会議「価値とイノベーションの創発による福祉システム検討分科会」への協力

(1)は、社会福祉系学会の交流と連携を通じた活性化を目指すもので、設立時から行われていました。また、情報共有活動の一環で、加盟学会の会員の皆様にご協力頂いたアンケート調査に基づいたワークショップ(「Withコロナ時代における研究に関する状況とニーズと学会活動のあり方についてのワークショップ」)を2024年11月30日にオンラインで開催する予定です。

(2)は2012年より開始されましたが、その背景には2011年3月11日の東日本大震災があります。大きな震災の被災者の方々のために、本連合ができることを議論した結果、「災害福祉アーカイブ」を立ち上げ、「災害福祉について学び合うことが使命である」という結論に至り、取り組みを始めた事業です。

(3)は、加盟学会が開催するシンポジウム、講演会、研究会等の開催で要する経費の一部を補助する制度です。コロナ禍で自粛が余儀なくされていた対面開催が徐々に実施できるようになり、この制度の活用を希望する加盟学会が増えています。

(4)は(1)同様、設立時から行われていたものですが、2024年度「社会福祉学分科会」から「価値とイノベーションの創発による福祉システム検討分科会」という新しい分科会となりました。これまでの「社会福祉学分科会」は主に社会福祉学を専門とする研究者によって構成されていましたが、新しい分科会では関連分野の研究者も参画し、より学際的に最先端の学術研究を目指して活動しています。本年度は、その分科会が開催するシンポジウム(2025年1月11日開催予定)の支援を行う予定です。

本連合の中核組織である本学会は、他の加盟学会と連携し、新たな価値に基づいた実践の知を社会に発信していく責務があります。

これからもお力添え賜りたくお願い申し上げます。

2024年度第1回理事会報告

開催日時:2024年5月25日(土) 18:10~20:30

開催場所:明治学院大学社会学部附属研究所(東京都港区白金台1-2-37)

I. 会長挨拶

定刻となり、空閑浩人会長より挨拶があった。

II. 理事会開会宣言(欠席理事の確認)

定款第42条に基づいて空閑会長が議長となり、出席理事および欠席理事を確認した。定款第43条に規定されている要件を充足したため、「2024年度第1回理事会」を開催するとの宣言があった。なお、定款第47条に則り、議事録署名人として空閑会長、大島監事、岡部監事を選出した。

III. 審議事項

第1号議案 入会審査

総務担当木下理事より、配付資料に基づき説明があった。審議の結果、運営委員会による臨時審査で承認済みの47名を含めて89名全員の入会が満場一致で承認された。

第2号議案 長期会員審査

総務担当木下理事より配付資料に基づき説明があった。審議の結果、会員歴が基準を満たしていない者や重複申請者を除き、26名を長期会員とすることが満場一致で承認された。

第3号議案 2024年度予算案の変更について

財務担当室田理事より、2023年度第5回理事会で承認された2024年度予算案からの変更点について、配付資料に基づき説明があった。審議の結果、2024年度予算案の変更が満場一致で承認された。

第4号議案 2023年度事業報告、決算報告および監査報告

総務担当木下理事より、2023年度の各事業が滞りなく遂行された旨の報告があり、財務担当室田理事より、法人全体および各事業における2023年度決算について、配付資料に基づき報告があった。また、大島監事および岡部監事より年4月30日に実施された監査について報告があった。

審議の結果、2023年度事業報告、決算報告および監査報告を5月26日に開催される2024年度提示社員総会に上程することが満場一致で承認された。

第5号議案 「一般社団法人日本社会福祉学会地域ブロック担当者委員会及び地域部会委員会規程」の改正について

総務担当木下理事より配付資料に基づき説明があった。役員の役割分担の見直しに伴い、「一般社団法人日本社会福祉学会地域ブロック担当者委員会及び地域部会委員会規程」の改正が提議され、審議の結果、満場一致で承認

された。第9期役員体制より改正された規程に則って担当業務を分担する予定であることを確認した。

第6号議案 「一般社団法人日本社会福祉学会電子取引データの訂正及び削除の防止に関する事務処理規程」の制定について

総務担当木下理事より配付資料に基づき説明があった。2024年1月より電子取引データのデータ保存義務化に伴い、事務局ではルールに準じて日頃から管理しておくことを確認した。「真実性の確保」について、改竄防止等のための事務処理規程を作成し、運用することが提議された。

国税庁のサンプルを基に作成した「一般社団法人日本社会福祉学会電子取引データの訂正及び削除の防止に関する事務処理規程」の制定について審議した結果、満場一致で承認された。

第7号議案 2026年度(第74回)秋季大会開催校または開催地域について

空閑会長より配付資料に基づき説明があった。「一般社団法人日本社会福祉学会秋大会開催担当に関する地域ブロックのローテーションに関する申し合わせ事項」より、2026年度(第74回)秋季大会は、北海道地域ブロックが開催校の選出あるいは実行委員会の立ち上げを進めることを確認した。審議の結果、基本方針および今後の流れについて、満場一致で承認された。

第8号議案 『社会福祉学』J-Stage 閲覧のための認証パスワードの設定について

総務担当木下理事より配付資料に基づき説明があった。運営委員会より2024年度も非会員の閲覧を制限する方針を継続する案が提議され、審議の結果、満場一致で承認された。

第9号議案 翻訳謝金の改正について(P.33-P.38 参照)

総務担当木下理事より配付資料に基づき説明があった。

翻訳謝金の改正に関して、長年低額に据え置かれてきたが、学術団体という特性を考慮して、大学における翻訳謝金等の相場の半額程度を本会の翻訳謝金額として設定することとし、新たな金額設定が提示された。

審議の結果、翻訳謝金額の改正が満場一致で承認された。さらに翻訳者への特典として、翻訳担当者となったことが研究業績または会員活動の実績となるよう、期間を明示した証明書を発行することが提案され、審議した結果、前例を確認したうえで対応することが承認された。

第10号議案 特定資産の継続について

財務担当室田理事より配付資料に基づいて、特定資産の概要と設置された経緯等について説明があった。

空閑会長より、特定資産を継続することとし、初期キャリア研究者へのサポートを主軸においた研究者支援事業、および学会の歴史に関する資料の収集およびデジタル化を目的としたアーカイブ化推進事業については特定資産の対象事業とする方針が提案された。一方でフォーラム事業については、2024年度までで一旦休止とする案が提示された。また、各担当理事より、各事業の活動状況および活動方針について報告があり、適切な方針のもと十分な活動が行われていることを確認した。

本件を2024年度理事会の継続審議とすることが満場一致で承認された。

第11号議案 その他

その他の審議事項は特になし。

IV. 報告事項

1. 2024 年度会員動向および 2023 年度退会者報告

総務担当木下理事より、2023 年度年会費の納入結果について配布資料に基づき報告があった。また、2024 年度に退会した会員の名簿および 2015 年度以降の会員数の推移より、会員数の減少が緩やかになったことを確認した。

2. 2024 年度定時社員総会準備状況および当日の進行について

総務担当木下理事より、総会当日の進行について配付資料に基づき説明があった。

3. 全国大会運営委員会からの報告

研究担当伊藤理事より、各行事の準備状況等について配付資料に基づき報告があった。

4. 機関誌編集委員会からの報告

機関誌編集担当坪理事より配付資料に基づき、機関誌『社会福祉学』の論文投稿受付・審査および編集状況について報告があった。

5. 国際学術交流促進委員会からの報告

国際学術交流促進委員会担当の金子副会長より、第 72 回秋季大会で開催予定のシンポジウムの登壇者や韓国及び中国の大会に関する情報提供を求めていることなどについて配付資料に基づき報告があった。

6. 学会賞審査委員会からの報告

学会賞審査委員会担当杉山理事より、二次審査対象の書籍 8 点、論文 5 編が選出されたとの報告があった。
次回学会賞審査委員会で授賞候補作が選定され、理事会にて候補作の審議、承認を行う予定であることを確認した。

7. 研究倫理委員会からの報告

研究倫理委員会担当村山理事より、現在進行中の調査案件はないとの報告があった。

8. 広報委員会からの報告

広報委員会担当岩永理事の欠席のため、木下理事より配付資料に基づき報告があった。随時、学会ホームページの更新および多言語翻訳を行い、定期的に広報活動を行っているとの報告があった。

9. アーカイブ化推進委員会からの報告

アーカイブ化推進委員会担当元村理事より、作業進捗状況等について配付資料に基づき報告があった。

10. 研究支援委員会からの報告 (P.63 参照)

研究支援委員会担当高良理事より、スタートアップ・シンポジウムや CS-NET サロン企画等について、配付資料に基づき報告があった。

11. 学会のあり方検討会(学会基本構想委員会)からの報告

総務担当木下理事より、配付資料に基づき報告があった。

会員数の減少など本会が抱える課題の解決に向けて、事業を横断的に、長期展望を持って検討する必要があることから、2024 年度より「学会基本構想委員会」と名称を変更して、常設委員会とすることが前回理事会で承認されており、今後の活動方針について説明があった。

12. 地域ブロックからの報告

- ・北海道地域ブロック:報告事項は特になし。
- ・東北地域ブロック:役員体制を交代する予定である。また、7 月発行予定の機関誌 20 号(記念号)の発刊作業を進めている。第 23 回大会を 7 月 28 日(日)に東北文教大学にて開催予定である。
- ・関東地域ブロック:3 月 17 日(日)に 2023 年度研究大会を開催した。アンケートの集計結果をもとに今後の研究大会および活動方針の検討を行う予定である。
- ・中部地域ブロック:5 月 19 日に春の研究例会として、自由研究発表、大学院生・若手研究者のための勉強会、総会およびシンポジウム開催し、盛況に終わった。
- ・関西地域ブロック:第 56 回若手研究者・院生情報交換会を 3 月 17 日(土)に大阪公立大学杉本キャンパスにて開催し、閉会後の懇親会も含めて盛會に終わったとの報告があった。
- ・中国四国地域ブロック:配付資料に基づき報告があった。7 月 14 日に第 55 回山口大会を山口県立大学にて開催予定である。
- ・九州地域ブロック:運営委員を交代する予定である。また、3 月に『九州社会福祉学』第 20 号(記念号)を発刊した。2024 年度は 12 月に鹿児島国際大学にて研究大会を開催予定であり、あわせて総会も 12 月に開催する予定である。

13. その他(後援依頼、関連団体からの報告、他)(P.78-P.82 参照)

・後援(協賛)依頼について

総務担当木下理事より、過年度の実績により 1 件の後援依頼に承諾したとの報告があった。

・関連団体からの報告

1) 日本社会福祉系学会連合

保正副会長より、「With コロナ時代における研究に関する状況とニーズと学会活動のあり方についての調査」と題した調査を実施し、600 超の回答を得たとの報告があった。回答の集計・分析結果は日本社会福祉系学会連合ホームページに掲載し、各加盟団体にも報告する予定である。

日本社会福祉系学会連合の次期運営委員として、金子光一会員、宇都宮みのり会員、小櫃俊介会員、鈴木敏彦会員を本会から派遣する予定であることを確認した。

2) ソーシャルケアサービス研究協議会

報告事項は特になし。

3) 社会政策関連学会協議会

報告事項は特になし。

4) 社会学系コンソーシアム

報告事項は特になし。

5) 人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会:GEAHSS(ギース)

高良理事より、3月27日に開催されたGEAHSS第7期運営委員会第1回(通算第13回)にて若手ワーキンググループの設置が承認されたとの報告があった。本会の研究支援委員会との連動等について、今後検討の必要があることを確認した。

6) 人文社会系学協会連合連絡会

報告事項は特になし。

7) 日本ソーシャルワーク教育学校連盟

空閑会長より、6月1日に総会がオンライン開催される予定との報告があった。

議長は、議事終了を告げ、20時30分に理事会を解散した。

以上

2024年度第2回理事会報告

開催日時:2024年5月26日(日) 12:15 ~ 12:40

開催場所:明治学院大学白金キャンパス本館2階1254教室(東京都港区白金台1-2-37)

I.出席者確認

出席者の確認をし、定款第43条に規定されている要件を充足したので、「2024年度第2回理事会」を開催するとの宣言があった。

II.審議事項

第1号議案 会長・副会長の選出

定款第17条および第18条2項により、会長候補である和気純子理事を会長に選定する案が発議され、全員異議なく決議された。さらに、副会長候補である本郷秀和理事および金子光一理事を副会長に選定する案が発議され、全員異議なく決議された。

第2号議案 理事の役割分担について

和気会長より、配付資料に基づき説明があった。各理事の担当業務および担当委員会、関連団体の役割分担を確認し、満場一致で承認された。

第3号議案 委員会の委員について

和気会長より、一般社団法人日本社会福祉学会第9期委員会構成について配付資料に基づき説明があり、審議の結果、満場一致で承認された。

第4号議案 その他

特になし。

III.報告事項

1.第9期役員就任承諾書の提出について

学会事務局担当者より、登記変更手続きに必要な就任承諾書等の提出について、配付資料に基づき説明があった。

2.2024年度年間予定

和気会長より配付資料に基づき2024年度のスケジュールについて説明があった。今年度の理事会および運営委員会もオンライン開催を主とするが、全国大会前日に開催される理事会のみ、対面もしくは対面とオンラインの併用での開催とする予定であることを確認した。

3.その他

特になし。

定款第 47 条に則り、和気純子会長、大島巖監事、本郷秀和副会長を議事録署名人として選出した。

議長は議事終了を告げ、12 時 40 分に理事会を解散した。

以上

2024年度第3回理事会報告

開催日時：2024年7月21日（日）10：00～12：30

開催場所：一般社団法人日本社会福祉学会事務局（Zoomによるオンライン開催）

I. 会長挨拶

定刻となり、和気純子会長より挨拶があった。

II. 理事会開会宣言（欠席理事の確認）

出席者全員がオンライン参加によるWEB会議の開催に際して、音声に問題なく、出席者が一堂に会するのと同等の意思表示が互いにできる状態にあり、議事進行に支障がないことを確認した。

定款第42条に基づいて和気会長が議長となり、出席理事および欠席理事を確認した。定款第43条に規定されている要件を充足したため、「2024年度第3回理事会」を開催するとの宣言があった。なお、定款第47条に則り、議事録署名人として和気会長、大島監事、岡部監事を選出した。

III. 審議事項

第1号議案 入会審査

総務担当金子（充）理事より配付資料に基づき説明があった。審議の結果、15名全員の入会が満場一致で承認された。

第2号議案 2024-2025年度の全国大会運営委員会の検討課題について

研究担当山田理事より、全国大会運営事業において今期中に取り組むべき5つの検討課題について、配付資料に基づき説明があった。

①秋季大会開催校の負担軽減を図ること、②オンデマンド配信への対応、③全体統括者制度の再検討、④秋季大会会期中のX（旧Twitter）配信体制の再検討、⑤学会のあり方検討委員会からの提起について、それぞれ審議した。

①は今大会ですでに研究発表要旨の事前チェックを全国大会運営委員会が主体となって対応しており、引き続きその方針を継続すること、②は継続審議とすること、③は第73回大会から実施の方針とすること、④は広報委員会の担当とすること、⑤は引き続き学会基本構想委員会と協働しながら検討を重ねていくこととなった。

第3号議案 学会賞授賞候補作について

学会賞審査委員会担当今井理事より、2024年度学会賞の審査経過および授賞候補作について配付資料に基づき説明があり、審議した結果、今年度の学会賞授賞が満場一致で承認された。

第4号議案 広報委員会からの審議事項（シリーズ企画、英訳）について

広報委員会担当岩永理事より配付資料に基づき説明があった。学会ニュースの新たなシリーズ企画に

ついて座談会を実施してその内容を文字起こしする場合、その経費を広報事業の予算から支出することの是非について確認があった。審議の結果、満場一致で承認された。

また、翻訳者の確保について相談があり、運営委員会で事前に協議した結果、見つからない場合は専門の業者に依頼することもやむを得ないが、AI 翻訳等を活用して一次翻訳した文章の校閲を依頼することとし、専門用語の翻訳等に関しては広報委員会で確認する案が提示された。審議の結果、運営委員会からの提案の通りに進めることとなった。

第 5 号議案 Zoom の契約更新について

総務担当金子（充）理事より配付資料に基づき説明があった。運営委員会より NEC ネットエスアイを代理店として契約を更新する方針が提示され、審議した結果、満場一致で承認された。

第 6 号議案 GEAHSS 副幹事学会としての運営体制について

総務担当金子（充）理事より、本会が加盟している GEAHSS について配付資料に基づき説明があった。2025 年 10 月より第 9 期幹事学会となることが決まっており、GEAHSS 主催のシンポジウムの開催や運営にも関わるため、学会全体で協力体制をとることを確認した。また、業務委託を行う必要があればその費用を 2025 年度予算案に反映することが提案され、審議した結果、満場一致で承認された。

第 7 号議案 特定資産の継続について【継続審議】

和気会長より、特定資産に関する前期理事会からの申し送り内容について配付資料に基づき説明があった。審議の結果、前体制の方針を引き継ぐこととし、詳細については今年度中に更なる協議を行っていくことが承認された。

第 8 号議案 その他

その他の審議事項は特になし。

IV. 報告事項

1. 2024 年度会員動向

総務担当金子（充）理事より、2024 年度の会員動向について配付資料に基づき報告があった。

2. 2024 年度定時社員総会報告

総務担当金子（充）理事より、2024 年 5 月 26 日に開催された 2024 年度定時社員総会での出席者数および議事録について配付資料に基づき報告があった。

3. 全国大会運営委員会からの報告

研究担当山田理事より、各行事の準備状況等について配布資料に基づき報告があった。

4. 機関誌編集委員会からの報告

機関誌編集担当理事より配付資料に基づき、機関誌『社会福祉学』の論文投稿受付・審査および編集状況について報告があった。また、二重投稿の指針について再度編集委員会にて協議を行っているとの報告があった。

5. 国際学術交流促進委員会からの報告

国際学術交流促進委員会担当の本郷副会長より、第72回秋季大会での学術シンポジウムでの登壇者および韓国・中国からの自由研究発表について、配付資料に基づき報告があった。

韓国社会福祉学会へ派遣する自由研究発表者の募集を行ったが、応募がなかったとの報告があった。

2024年度は中国が日中韓三か国協定に基づく幹事国となり、三か国協定の覚書を更新する必要がある。12月に和気会長、本郷副会長（国際学術交流促進委員長）および通訳として索委員または楊委員が出席予定である。

6. 学会賞審査委員会からの報告

学会賞審査委員会担当今井理事より、今年度の学会賞の審査経過について配付資料に基づき報告があった。また、第72回秋季大会の開会式に引き続いて執り行われる学会賞授賞式、および当日に向けてのスケジュールを確認した。

7. 研究倫理委員会からの報告

研究倫理委員会担当中村理事より、配付資料に基づき報告があった。二重投稿の疑いにより、機関誌編集委員会より研究倫理規程に違反する行為申立書が提出されたため、調査を開始したとの説明があった。

8. 広報委員会からの報告

第4号議案にて報告済みである。

9. アーカイブ化推進委員会からの報告

アーカイブ化推進委員会担当元村理事より、委員会発足の経緯、これまでの活動の総括および今後の活動方針について配付資料に基づき報告があった。

10. 研究支援委員会からの報告

研究支援委員会担当山野理事より、第72回秋季大会で実施するスタートアップシンポジウム、CS-NETサロンの準備状況について配付資料に基づき報告があった。2024年3月に実施したCS-NETサロンにおいてGatherを使用し、大変好評であったことから、今後も活用できるよう有料版の導入も含めて検討を進めていく予定である。

11. 学会基本構想委員会からの報告

総務担当金子（充）理事より、本理事会で提示された案および意見等を参考に、今後、委員会で検討を行う予定であるとの報告があった。

12. 地域ブロックからの報告

- ・北海道地域ブロック：報告事項は特になし。
- ・東北地域ブロック：記念号となる機関誌20号を7月に発刊予定である。第23回大会は7月28日（日）に東北文教大学にて開催する予定である。
- ・関東地域ブロック：6月27日（木）に会議を開催し、各委員の担当委員会を決定した。
- ・中部地域ブロック：5月19日に春の研究例会を開催し、自由研究発表、大学院生・若手研究者のため

の勉強会、総会およびシンポジウムを実施した。今後は大学院生・若手研究者のための勉強会をより充実させるため、春の研究例会とは別日に開催し、開催回数を増やす等の検討をしている。

- ・ 関西地域ブロック：報告事項は特になし。
- ・ 中国四国地域ブロック：7月14日に山口県立大学にて第55回ブロック大会を開催し盛況に終わった。また、同日昼に総会も開催した。現在、会報24-1号の発行作業を進めている。
- ・ 九州地域ブロック：12月21日-22日に鹿児島国際大学にて研究大会の開催予定である。現在、8月末日を締め切りとして機関誌の投稿を受け付けている。

13. その他（後援依頼、関連団体からの報告、他）（P.53-P.56 参照）

◆後援（協賛）依頼について

総務担当木下理事より、過年度の実績により2件の後援依頼に承諾したとの報告があった。

◆関連団体からの報告

1) 日本社会福祉系学会連合

宇都宮理事より配付資料に基づき報告があった。2024年度の主な事業として、2023年度に実施したアンケート結果をもとにした公開研究会の実施と、災害福祉アーカイブの継続について説明があった。また、加盟学会を対象とした補助金制度について9月に追加募集を行う予定であるとの報告があった。

2) ソーシャルケアサービス研究協議会

報告事項は特になし。

3) 社会政策関連学会協議会

杉山理事より、8月1日に総会を開催し、所理事が代表に選出される予定であるとの報告があった。

4) 社会学系コンソーシアム

金子（充）理事より、来週理事会が開催される予定であるとの報告があった。

5) 人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会：GEAHSS（ギース）

報告事項は特になし。

6) 人文社会系学協会連合連絡会

報告事項は特になし。

7) 日本ソーシャルワーク教育学校連盟

報告事項は特になし。

議長は、議事終了を告げ、12時30分に理事会を解散した。

以上

日本社会福祉学会事務局から

◆会費の納入はお早めをお願いします

平素より学会活動にご理解、ご協力を賜り、誠にありがとうございます。

皆様、2024年度の年会費のご納入はお済みでしょうか。皆様からお納めいただきました年会費は、学会活動を支える貴重な財源となりますので、未納の方は至急お納めくださいますようお願いいたします。

また、2022年度の年会費が未納の方は、『社会福祉学』の送付を一時停止させていただきます。会費納入を確認しましたら学会誌の発送を再開いたしますので、ご了承くださいますようお願いいたします。

これから納入される方で、銀行振込みによるご入金をお考えの方は、お名前の前に会員番号を入力してください。また、大学等のご所属先を通じてお振込みをされる場合は、学会事務局宛に①会員名、②会員番号、③振込日、④振込金額、⑤振込名義、⑥備考をメールまたはFAXでご連絡ください。

◆登録情報更新のお願い

お引越しや所属先の異動等により登録情報に変更のあった方は、学会ホームページの会員ページ「マイページ」より、以下の手続きが可能ですので、どうぞご活用ください。

①登録内容の確認・変更、②パスワードの変更、③会費納入状況の確認、④会員名簿検索

◆メールアドレス登録のお願い

本学会では会員の皆様への連絡手段としてメール配信を利用しています。メールアドレスの登録をされていない方は、メールアドレスの登録にご協力くださいますようお願いいたします。現在、メールアドレスを登録されていない方で、メールアドレスの登録にご協力いただける方は、学会事務局<office@jssw.jp>までご連絡ください。

また、会員ページ「マイページ」にログインされる際のパスワードをお忘れの場合、会員番号と登録されたメールアドレスによりWEB上でパスワードの再設定が可能です。ぜひ一度ご確認ください。

編集後記

今号の学会ニュースも盛りだくさんの内容で、拝読しながら(当然のことではあります)学会は会員活動が源なのだと再認識しました。原稿をお寄せくださった会員みなさまに心よりお礼申し上げます。

保正会員の秋季大会報告に「持続可能な大会運営のあり方の確立は喫緊の課題」と書かれていたように、学術業界の「持続可能」を考えるのはたいへん重要であると思います。このテーマに関連して、今年の3月に本学会も加入する「社会政策関連学会協議会」において、シンポジウムを開催しました(<http://casp-home.jp/>)。その際、私は「若手研究者の育成と学術の課題」というテーマで報告させていただいたのですが、内容の多くは、学術会議の若手アカデミーが発出した「見解『2040年の科学・学術と社会を見据えていま取り組むべき10の課題』」(<https://www.scj.go.jp/ja/scj/wakate/index.html>)にあります。お忙しいとは存じますが、こちらもご覧いただければ幸いです。

岩永理恵(日本女子大学)